

幼児の教育

家庭・保育所・幼稚園



2002年9月号



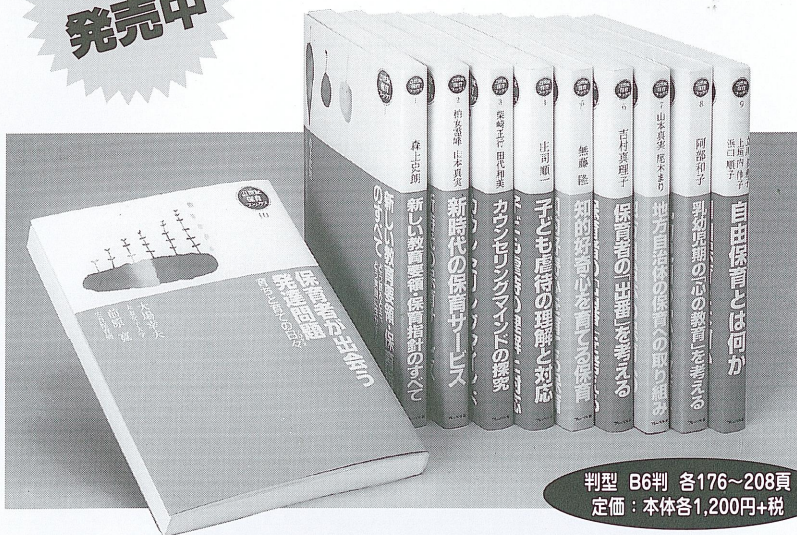
21世紀
保育
ブックス

21世紀保育ブックス

これからの保育はどの方向へと向かっていくのか。
新しい21世紀の保育を展望しながら必要とされる諸問題を根本的に掘り起こし、
確実に保育者を導き育て、将来の保育への指針を与えるシリーズ！

好評
発売中

編集委員 森上史朗(子どもと保育総合研究所代表)
柴崎正行(東京家政大学教授)
柏女霊峰(淑徳大学教授)



判型 B6判 各176~208頁
定価：本体各1,200円+税

既刊本

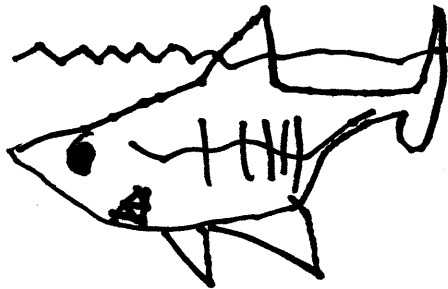
- | | |
|-------------------|---------------------|
| ①新しい教育要領・保育指針のすべて | 森上史朗 著 |
| ②新時代の保育サービス | 柏女霊峰・山本真実 共著 |
| ③カウンセリングマインドの探究 | 柴崎正行・田代和美 共著 |
| ④子ども虐待の理解と対応 | 庄司順一 著 |
| ⑤知的好奇心を育てる保育 | 無藤 隆 著 |
| ⑥保育者の「出番」を考える | 吉村真理子 著 |
| ⑦地方自治体の保育への取り組み | 山本真実・尾木まり 共著 |
| ⑧乳幼児期の「心の教育」を考える | 阿部和子 著 |
| ⑨自由保育とは何か | 立川多恵子・上垣内伸子・浜口順子 共著 |
| ⑩保育者が出会う発達問題 | 大場幸夫・前原 寛 共著 |

<以下続刊>

キンダーブックの **フレール館**

幼児の教育

第101卷 第9号



幼 児 の 教 育 目 次

—— 第一〇一卷 第九号 ——

© 2002
日本幼稚園協会

巻頭言 生殖医学の発達と子ども観の更改……………本田 和子 (4)

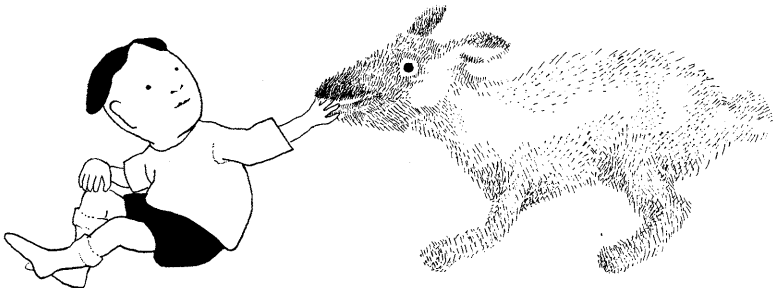
第十四回「世界青年の船」航海から……………小川 了 (9)

障碍をもつ幼児の保育(2)

—この子と出会ったとき……………津守 真・津守 房江 (16)

ある日…………… (26)

いま、子どもたちは「今どき」の親、「今どき」の子ども……………伊藤亜矢子 (28)



ピエール・ブルデューの『実践感覚』を読む

(2)ブルデュー社会学における

「主観主義」と「客観主義」の超克―主知主義批判―……………安田 尚……………(34)

遊びを通して子どもの育ちを考える(3)

二学期始発の急ぎすぎた保育者……………阿部 康子……………(46)

生きもの共存の畝間から(5) タネまきと間引き……………徳野 雅仁……………(54)

MとKのこと……………上坂元絵里……………(56)

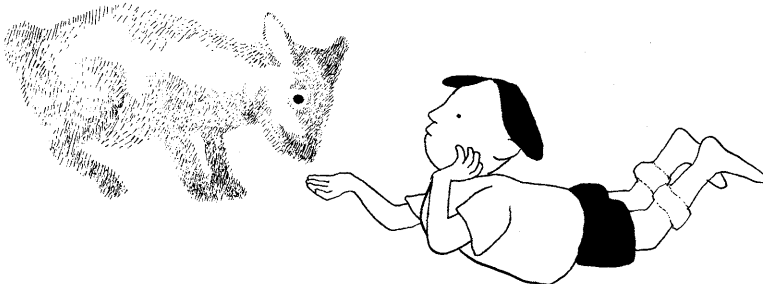
表紙絵／佐々木麻こ

扉題字／津守 真

扉カット／お茶の水女子大学附属幼稚園園児
カット／彌永たたえ「ひとりぼっち」

編集委員／田代 和美・榎田 正子・高橋 陽子

編集部／仲 明子





巻頭言

生殖医学の発達と子ども観の更改

本田 和子

「幼稚園教育に関して、いま気になっていること」などと問われることがある。しかし、こうした問いに対して、咄嗟に的確な答えが浮かび上がってはこない。しかし、「いま、子どもに関して気になっていること」と、問いが変わるなら、即座に提示しようと思うのが、表題のような問題なのである。

生殖医学とその応用版である生殖医療の発達は、日進月歩という形容がまさにふさわしい。人工授精や卵子の胎外育成、あるいは、他人の子宮を借用する代理母などは、既に耳を驚かす珍事ではなくなって、現実には活用されている不妊治療法の一つと化した。精巢内に潜む極く僅かの精子を探し出して卵子の細胞内に注入する「卵細胞質内精子注入法」が



開発されたり、あるいは、異種の動物の精巢を利用した精子の形成や卵子の若返り技法などの成功も伝えられ、既に実用段階に到達しているとか言われてもいる。

クローン人間の産出については、倫理上の問題が指摘されて世界的規模で危険視され、禁止・抑制の方向が示唆されてはいる。わが国の場合も例外ではない。しかし、それ以外の生殖医学に関しては大方の関心も薄く、時折メディアを賑わす新医療に関しては、単なる生化学的・医学的な新知見として視野の外に位置づけてしまうのが一般であろう。不妊に悩む夫婦以外には、子ども関連の仕事の従事者と言えども同様である。まして、幼稚園や保育所でこの種の話題が注目され、論議の対象とされることなど皆無と言うべきであろうか。

しかし、こうした研究の加速化が示すのは、「子ども観・家族観」の更改であり、より広くは「人間観」そのものを抗いようもない激しさで変化させていく動きに他ならない。たとえば、いま、アメリカ合衆国では、年に数万人生まれるとされている人工授精の子どもたちの親探しが問題になっていると言われる。精子提供者は告知しないという条件下で生を受けた子どもたちが、しかし、自身の出自を知りたいと望むとき、法的にも現実にもそれが適えられない。そんな状況下で、親と子の間には、従来とは異なる新しい問題が生じているという。



わが国の厚生労働省に組織された検討グループでは、いま、「出自を知る権利」を認める方向が打ち出されようとしている。子どもが真実を知ったとき、育てている現在の親との間に溝が出来るのではないかと懸念されつつも、子どもが自身の出生に疑念を抱いたとき、それを明らかにしないことは子どもの人権への侵害であるとして、「知る権利の尊重」と「告知という対処の仕方」が模索されているという。

自分はいまここにいる両親の子どもではない、それを知ること、長年の疑惑と不信感にさいなまれていた子どもの上に、ある種の解放感が訪れることは事実であろう。ただし、そこで、遺伝関係が否定されてた上での新しい親子の在り方が、どのように構築されると言うのだろうか。それに、そうした親子を支える仕組みを、現実の社会はどの程度に保持し得ているのだろうか。

もしかしたら、このことは、単に発生した事柄への対応や事後処理ではなく、抜本的な親子観・家族観の更改として問題提起さるべき事柄かも知れない。そう考えるとき、私たちの社会は、人の生き死にを左右する医学・医療の発達に対して、余りにも無知・無関心であったと気付かすにはいられない。

年長者と年少者が暮らしを共にし、年長者はその生活上の力を行使して年少者を保護・育成する。こうした人のありようが「親子」と呼ばれ、その集団が「家族」と呼ばれてき



た。近代化の進行した社会にあっては、多くの場合、この家族は血縁で結ばれ、子どもは二人の親との間でその遺伝子を共有する者であった。

しかし、生殖医学・医療の進展は、こうした親子・家族のありようを改めて問い直し、それだけが親子でもなく家族でもないとい異議を申し立てる。何しろ、現実には、血の繋がりもなく遺伝子の共有もない年長者と年少者が、「実の親子」という法的関係を結ぶことが可能とされるのだから。いまここにいる父親とは無縁の精子から産まれた子どもが、一家のなかで「母から生まれた父の子ども」として存在させられるケースが、特別な例外としてではなく正当に存在し得る現実が発生しているのだ。

こうした事態が進行すれば、幼稚園や学校など、子どもの存在するあらゆる場において、それらへの対処が必要とされることは自明であろう。たとえば、子どもが通常、格別の自覚もなしに口にする言葉、「お父様にそっくりね」などいうそれが、ある種の子どもを傷つける残酷な差別語として機能する日が訪れないとも限らないのである。

それにもまして懸念されるのは、子どもを人工的に創出可能なものに変えた医療技術が、私どもの「子ども観・人間観」を徐々に侵食し始めていることではないか。いつの間にか、私どもの子ども観は、子どもを人工的に産出可能、そのゆえに操作可能なものと見なす方向へと変化し始めているのかも知れない。何しろ、子どもの誕生という生命の神秘



が、好みの精子と卵子の組み合わせによって操作され得るといふ現実から、既にして目を逸らすことは出来なくなっているのだから。

子どもが「作られるもの」であり、その製作の決定権が私ども大人世代に委ねられているとは、子どもに対する生殺与奪の権を大人たちが手に入れてしまったということになる。出生前の診断によって、障害のある子どもの出産を拒否し得るといふ現状は、このことをものの見事に証しする例と言えよう。もし、それら人工的子ども親の所産として、眼前の子どもに対して「産出されるべきではなかった」という後悔が生じ、育児の営みが自己決定の誤りの後始末として位置づけられるとすれば……。

ここでは、ことがらの可否を云々するつもりはない。生殖医学の発達や人工授精の価値について、論議することはここでの任ではないのである。しかし、以後顕著になっていくであろう諸種の事態が予測されるいま、斯界の動向に対して余りにも無知・無関心である現状に警鐘を鳴らしておきたい思いに駆られている。

(お茶の水女子大学)

第十四回 「世界青年の船」航海から

小川 了

二〇〇一年十月二十五日から十二月十三日までの五十日間、第十四回世界青年の船団長として、世界十五カ国の青年たち約二七〇人とともに太平洋地域の数カ国を巡航する旅をしました。なかなか得難い経験であり、読者の皆さんの参考になることもあるかと思いますが、簡単に紹介がてら、船内生活の幾つかについてご報告しようと思います。

はじめに「世界青年の船」とは何かをご紹介しておきましょう。世界青年の船は、「東南アジア青年の船」と並んで日本政府（直接には内閣府）がおこなう大事業の一つで、日本と世界各国、または東南アジア各国の青年が船内で生活をともにする中で、地球的規模の課題や各国に共通した課題についての研究・討論をはじめとする各種の交流活動を通じて、また訪問国にお

ける種々の活動を通じて、参加青年相互の友好と理解を深めるとともに、国際化が進展する各分野において指導性を発揮できる青年の育成を目的として毎年おこなわれているもので、世界船は昨年で第十四回、東アジア船はすでに二十八回を数えています。第十四回世界船は当初、シンガポールからアラビア地域、そして東アフリカ、南アへ向かい、帰路はモーリシャスに寄って太平洋を突っ切るといふ航路で計画され、準備もされていたのですが、アメリカでのテロ事件後、太平洋に艦船が集結する事態になり、急遽、計画変更、晴海を出た後、サイパン、フィジー、ニュージーランド、シンガポール、バンコクを巡ることになりました。世界船は原則として一年おきに南西アジアからアフリカ地域へ向かう航路と、北米、中南米からオセアニア方面に向かう航路のものが予定されており、航路により参加諸国もアフリカやアラブ諸国、ヨーロッパが主体である場合と、南北アメリカ、オセアニア諸国

が多い場合に分れます。

昨年は本来なら南西アジア・アフリカ航路の年で、日本（約一二〇人）の他、アメリカ、オーストラリア、ブラジル、インド、スリランカ、エジプト、バールイン、アラブ首長国連邦、ケニア、南アフリカ、モーリシャス、ギリシャ、フィンランド、イギリスが参加、外国からは各国ともおよそ十人ずつという構成でした。日本人参加者（参加者のことをParticipant Youthといい、略してPY）は各都道府県から数人ずつ選抜されるようになっており、約五割が学生だったようですが、他は色々な職種の人々です。就職している場合、五十日という長期間を休むのは簡単ではないでしょうから、職場の理解は不可欠でしょう。外国では、参加希望者は大変多いようで各国とも競争率はかなり高いとのことでした。フィンランドやアフリカからの参加者のほとんどはユース・ワーカー、つまり何らかの青年活動に関わっていたようです。

さて、船は「につぼん丸」という豪華客船を借り切る形になるわけです。二万トン超の大きな客船で、両舷側には縦揺れを最小限にするためのコンピュータ制御された翼（幅二メートル、長さ四メートルで、スタビライザーというそうです）がついており、あまり揺れないのですが、それでも全く揺れないというわけにはいきませんから、出航後、数日間はどうも気分がすぐれないという人が多くなります。そういった身体の不調を忘れさせると同時に、船内で新しく生活をとにもする世界の若者たちの親睦を促進する目的もあるのでしょう。さまざまな親睦活動が組織されます。ナショナル・プレゼンテーションがこの時期の最大の行事でしょう。毎日、午前中は班ごとに討論会や各種文化活動がおこなわれるのですが、午後から夕食を挟んで夜にかけて参加各国がそれぞれ実に趣向を凝らしたプレゼンテーションをするのです。美しい民族衣裳を身につけ、踊り、歌い、そして各国ごとにその特徴を

際立たせるような演出がなされます。日本の場合は、参加者が全国に及ぶわけですから、各地方ごとの踊りや歌、民芸などが披露されます。何しろ若い人達ばかり（原則的に十八歳から三十歳まで）ですから、各国ごとのプレゼンテーションの後には皆がステージに上がり、ダンスになるわけです。世界中の民族衣裳が入り乱れ、その衣裳を互いに交換し合い、さまざまなダンスがなされました。

サイパン、スヴァ（フィジーの首都）を経てオークランドまでが旅の前半部だったといつてよいでしょう。各々の寄港地ごとに、それまでの世界船参加者たちが待ち受けてくれており、寄港している間（二三日程度）の色々な行事をリードしてくれます。単なる観光



に終わらず、各種の社会事業施設の訪問をします。寄港地を出港するとき、PYを接待してくれた既参加青年たちは自分たちが乗船したときのあれこれを思い出すのでしよう、胸詰まらせて涙する青年もいました。

オー克蘭ドからシンガポールまでの十四日間、船はどこにも寄港せず、走り続けたのですが、この間は私たち指導官にとってなかなか厳しい講義期間でした。毎朝九時から正午まで指導官それぞれの専門領域に関する講義をするわけです。間に挟まっている日曜日は講義がなく、ホッとしたものです。指導官としては団長以下、七人が乗っていました。日本人だけではありません。カナダ、韓国、オーストラリア、ナイジェリアの人でした。各々、環境問題の専門家であったり、心理学や教育を専攻する人であったり、また当今の重要テーマであるグローバリゼーションやボランティア活動の専門家であったりするわけです。外国参加者たちはいずれも議論には活発に参加しますから、

それに釣られて日本人参加者もよく発言するようになり、それだけ指導官としてはきちんとした準備をしておかなければなりません。言い忘れましたが、船内の使用言語は英語です。

しかし、他方からすると、指導官と青年たちとの間には年齢の差、また指導官と参加青年という意識の差から、それまでは何となく完全にはうちとけない感じがあったのですが、その名状しがたい疎隔感が講義の場での互いの議論を通して急速に解消していくのが感じられました。やはり、教師にとっては教室こそが生徒との間で人間としての交流を築くベースになるのだということを実感したものです。教室での真剣な渡り合いが基礎にあつてこそ、その他の場所での交流も親身になれるのであって、逆ではないということがよく分かった次第です。大きな船とはいえ、何しろ海に取り巻かれ、限られた空間で食事も風呂も同じにし、デッキを歩いても常に顔を合わせるわけですから、疎

隔感を抱いたままではうまくいかないのです。

食事に触れたついでに記しておきましょう。毎日の三食は船内の大レストランでとるわけですが、和食、いわゆる洋食、中華風のものもあり、セルフ・サービスです。食事内容は毎日変わり、デザートも数種類あり、特にまず毎日出るアイスクリームにはいずれの国の青年たちも夢中になっていたようです。白いご飯を食べるとはいえ、それにケチャップをかけたり、ヨーグルトと砂糖をかけて食べる人がいたり、ピーナツと一緒に食べる人がいたりするのを見るだけでも異文化体験になったといえるでしょう。また、航海期間中、イスラム教徒にとつてのラマダン（日中は断食する）があり、この期間は船内でも断食する人がいたのも日本人にとっては勉強になったはずです。もちろんですが、料理にはどんな肉が使われているか必ず表示されています。インドからの参加者の中には厳格な菜食主義者もいて、肉に手を出さないのももちろん、デザー

トにも卵が入っていないか確かめる人もいました。イスラム教徒への思いやりでしょう、豚肉料理、ハムやベーコンも一般のサービスタ台から少し離れた場所においてありました。こういった異文化体験は日々の接触を通してはじめて日本人参加者に実感されたのではないのでしょうか。一度だけですが、鯨肉がでたことがあります。さすがに、外国人参加者は誰も手を出さなかったようです。ダチョウ、ウサギ、鹿なども供されました。

また、これはいささか不思議なのですが、卵や肉、魚にせよ、トマト、キュウリ、アスパラガスや大根、春菊などの野菜にせよ、毎日驚くほど新鮮なものが出ます。毎朝のパンは船内で焼いているのです。船が寄港すると、その地の賓客など多くの人々を招いてレセプション・パーティが開かれ、いつもとは違ったごちそうが出ます。船で料理に携わる方々は、ほとんど休みがない（と思われる）状態で、毎日三

食、そしてラマダン中はイスラム教徒のための夜食まで、全く大変なご苦労があったと思います。また、若い参加青年たちは、船内では彼等の同年齢の若者たち（かなり多くがフィリピン人）が、船員としてさまざまな業務に携わっていることも眼にし、当然考えるところがあったはずで。

ところで、はじめにも述べたことですが、第十四回の世界船は当初の予定がアメリカでのテロ事件を受けて航路変更を受けました。しかし、当初予定されていた参加諸国には変更があったわけではありません。すでに記したとおり、アメリカ、イギリスと並んでアラブ諸国からの青年たちが乗り組んでいました。晴海出港は十月二十五日、アメリカはテロへの報復行動に出、アフガニスタン空爆を開始し、市民への被害が広がっていた頃でした。それに対してパキスタンをはじめとするイスラム諸国では反米デモが激しさを増して

いたのです。私としては、この時期に世界青年の船団長という任に当たったことに、ある重苦しさを感じないわけには行きませんでした。

アメリカ、イギリスなど西欧の国の参加者とアラブ諸国からの参加者との間で熱い議論が起り、それがいさかいに発展したりした場合、団長としてどうすればいいのか、考えざるを得ませんでした。どっちつかずの答えをすることには意味がないだろうし、はっきりとした立場を表明した結果、つるし上げになるかもしれないとさえ考えました。「団長、どう思うか」といわれて、「はい、ダンチョウの思いです」としゃれのめしてすむ場合ではない。

結果的にはこの重苦しさは杞憂だったのです。確かに議論の場では、相当に白熱した場面があり、また、



双方とも簡単には相手の論理を受け入れはしなかったのですが、船内でとるべき行動は互いに弁えていました。互いの文化、論理を尊重するということが、日々の生活をともにするということが、そう簡単に両立するものではないと認識した上で、しかし船内には規律が必要であることをよく理解していたのだと思います。また、先にも述べましたように、ナショナル・プレゼンテーションとそれに続くパーティーでの親睦は実際的な効果を発揮したのです。

というわけで、シンガポールにて外国青年たちすべてが下船する日は、参加青年たちにとって実に悲しい、寂しい一日だったようです。それぞれの国へ向かう飛行機の時間に合わせて次々に国ごとに青年たちが下船していくのですが、下船に合わせて、各国がナショナル・プレゼンテーションの時に使った歌、音楽が船内に流れ、劇的要素が強められました。私にとってもまったく沈鬱な思いの一日でありました。

下船して三ヶ月後、インドやバレーライン、アラブ首長国などで世界船の「同窓会」のような会合がもたれたと聞いています。かなりの数の青年たちが集まったとのこと。仲間という意識は確実に醸成されたのでしよう。また、聞くところによると、タイやアラブ首長国など、幾つかの国で日本の「青年の船」を模した国際的な青年たちの船旅組織が生まれているとのこと。世界青年の船に乗ったからといって、すぐに友好の輪が広がるといったものではないと思いますが、しかし、友好というものはじっくり時間をかけて作り上げていくものですから、この青年の船事業は長い目で見た国際間の親善に寄与していることは間違いないでしょう。

(東京外国語大学)



障害をもつ幼児の保育(2)

—この子と出会ったとき—

津守 真

津守 房江

歩くということ その二

どこまでも走っていく男の子に出会ったときのシヨック

前回は、子どもが出て来た場所に戻って、自分の居場所を確認するということを話し合いました。今回は、際限がなく外へ外へと向かって歩いて行く子どものことを考えてみたいと思います。

三歳のY君がはじめて面接に来たとき、部屋の中には子どもが興味をもちそうなものがいっぱいあるのに、それらは目に入らず、部屋の奥の重い扉に向かって体当たりして、悲壮な顔をして向こう側に行こうとしました。そこは地下室や職員室に通じるドアで普段カギをかけてありました。向こう側の空間はどうなっているのか、扉の向こう側に対する強い好奇心と阻止された表情がとても印象深く心に残りました。そのような資質の子どもに私たちが慣れていなかったからでしょう。それからすぐに入園することになって、次の回に遠足でした。それについては津守真の記録があります。

代々木公園遠足

公園前で待ち合わせをした。Y君は、入口のコートの売店に一目散にすっ飛んで行った。そこから連れ出そうとすると力を抜いて寝そべってしまう。抱えて連れて行こうとすると、暴れてどうしても売店に戻ろうとする。F先生と二人で数メートル行っただけで、こちらの力が尽きてしまう。缶ジュースを一本買うこと

にしてそれをもって行くが、売店に行きたくて暴れる。しばらく行ってから缶をあけて飲むと、私共の両手につかまって歩いた。母親のところまで行くが、Y君はどんどん歩いて行くので、私がついていった。公園の清掃用の黄色い自動車のそばに行き、それに触った。公園のおじさんが中を見せてあげようかと言ってドアを開けてくれた。ドアを何度も開けたり閉めたりした。後部ドアに気が付き、それも開けたり閉めたり

した。そのうちに自動車に足をかけて内部に入り込もうとした。おじさんたちが来て、自動車は出発したので、歩いてサイクリング道路に出た、それに沿ってどんどん歩いて行った。私はY君の歩くという気持ちが分かったから、Y君が歩く方向に付き合いながらそばに寄って話しかけたり歌ったりした。どこにでも歩いていいよという気持ちと、一緒に親しみ合う気持ちとの両方があった。歩いている間はとても平和な散歩だった。母親のところにもどるマップが頭の中にできているのかどうか疑問に思った。静かな林の中の道路を歩く。斜めになった大木に寄りかかり登ろうとす。木の葉を拾う。じきに捨てる。緑石に腰を下ろす。私も一緒に腰を下ろす。蟻をいじる。道路が通行止めの柵に来るとそこを登ろうとする。サイクリング道路の垣根の間を擦り抜ける。

*

津守 房江（以下Fと略記する）

私と三人のときは、売店のおばさんに嫌がられながら、カウンターのの上によじ登り、止められなくてとても大変でした。でもあなたと二人のときにはとても静かなようですね。大変だと思わないで付いて行ったのは良かったですね。初めて出会った時なのだから。

津守 真（以下Mと略記する）

売店を通るときには大変だったが、その後は面白かった。私にはどこまで行ってもいいよという気持ちと親しみを分かち合う気持ちとの両方がありました。静けさを楽しみながら歩いていきました。

F それはすごいわね。その後も園の外に出て行くというテーマが続いたのでしょ。

M Y君は学校の垣根を乗り越えて向こうに行こうとしたり、煙突や屋上に行く階段を登ろうとしたりしました。

際限のない外出時の大人の気持ち、悩み

M Y君は学校の地下に行くドアを開けて地下室に行くことになるのだが、私はそのとき三人でこの子のクラスを担当をしていて、私には外に行くことにとても葛藤があったのです。三人の中のひとは割に悩まずに地下にも行けた。そのころの地下室はさらに奥から外の道路に出る通路になっていて、Y君はじきにその通路が分かり、その後、外へ出て行くことが多くなってきました。私ともうひとりの保育者にはとても葛藤があって、それが正直な所の問題点だったのです。

F 保育者の性格や育ってきた経験もあるでしょうね。

M どちらが良いかは一概に言えないが……。

Y君のような子どもにはその後何人も出会ってきました。家から学校までたどり着かないのです。途中で止まってしまつて。母親は一日中、子どもと外を歩い

ています。学校にも到達しないで、機嫌のいい時には近くの公園で遊ぶのです。しまいには公園の出口でアイスクリームを食べる子もいて、学校に戻ろうとしません。ある子は地下鉄に乗りたいたことが分かりました。その点は代々木公園にいったY君と似ています。

母親は何度も学校に連れて来ることを試みるのですがうまくいきません。子どもが聞き分けてどこかに行こうと言うとついて来るけれど、ある母親はそれがこわいと言いました。なぜこわいのですかと尋ねると、それをやると子どもと自分との間の糸が切れてしまうのがはつきりと分かるのだと言うのです。

F それはすごいですね、つまり人間同士、ともに歩む同士ではなくて行く手を阻む障壁になつてしまうのね、大人が。

M 母親がそれに気が付いてそれがこわいと言うことも、そうだろうと思う。

F 大人がどこまでも一緒に行ってあげると言う気

持ちにいつもなれるとは言えないでしょ。家には他の家族もいるでしょ。学校には終業の時間があるから、もうそろそろ帰ろうよと言うのは当然のことかと思うけど。それに対してその子が不信感をもつというのはどうしたらいいのでしょうか。

M 当然のことなのだが、分かるようになってからも子どもが帰る方向になるというのは大人にとって大変な心遣いと労力です。普通の幼稚園では考えられないことかもしれないけど。

F 一人の保育者が子どもを責任を負って一対一で外へ行くのを他の保育者の中にどうやって位置づけるのでしょうか。

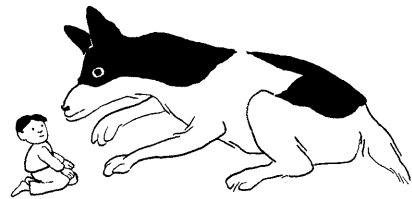
M 私は、その子に付き合っている保育者にどこに行ったかができるだけ聞くようにしています。そうするとその都度、電車のくるホームとか、なに行きの電車とか、その子の興味が分かってきます。そうしているうちに、外を歩くのが好きな子が園内で楽しそうに

トランポリンを飛んでいて、余裕が感じられることもありました。母親にそのことを告げたら、「先生にそういうふうに見えてうれしい」と言いました。お母さんの努力が報われたと思つたのでしょうか。

最初のY君について言うと、だんだん大きくなってきて、私

は自分の体力がついていけないで、若い保育者に代わってもらいました。Y君が寄り道をして店屋の棚に登るとか、若い職員はそれを苦にしないでやっていて、私は偉いと思つた。私より気にしなかったことは確かです。

F 子どもが外へ外へと冒険するとき、人によって外に向かつてついて行ける人とそうでない人とあるように思います。私は最も外について行かれない人だと思



うのです。今ここで楽しめないで何で外に行くのかかと思ってしまう。だからこそ「多動と言われる子」に私は本当に関心があります。それでいてなかなか関係が付けにくい。子どもにとって大人とは何なのでしょうか。

M 僕にまず言えるのは前進方向を阻止する人間。そういう資質をもった子どもはこの時期には前進しかないのだから、私はただ阻止する人にはなりたくないと思つた。それで親しむ人と、両方をやろうと思つた。

ある先生は苦勞しないでそれをやれるが私はものすごく葛藤がある。他人がどう見るかもね。代々木公園はそれをやらせるだけの環境がある。その代わり運動量が大さい。あれだけ広いからね。公園の周辺を子どもを追いかけて走るんだから。その後Y君とよく外出した先生は偉いと思つた。Y君は、あるときは自転車屋で車輪や道具をいたずらした。その先生は自転車屋さんから怒られたが、子どもと社会との両方を視野に入

れて、両方に失礼にならないように振る舞っていた。

F 代々木公園のことに戻ると、私は大きなシートを広げて、いつでも戻ってらっしゃいとシャボン玉を吹いていました。また、歩いて遠くに行きたくない人もいる訳だから、縄とびやったり、小石をザラザラやったり、ここで遊んでいるからねと、遊んで待っていたのです。だから私は保育者としても全く定着型なのです。遠くまで走って行かねばならないときは、早く戻りたくてしょうがない。保育者の資質と自分の限界を感じさせられることが多かったのです。

園の中での保育力

M 愛育（愛育養護学校）の近くの公園はそういう点ではいい。私はよく行きました。それでもなお、私は学校の中での付き合いを重視しようと考えたんです。自分の保育力をもって付き合うことが大事だと。事実面白く遊んだときは外に行かないですんだ

ときもあつたのではないかと思えます。ずつと後になつてからですが、Y君がシャツをまくり上げておなかを出して、私かなめるといふざけっこをしましたた。

Dちゃんは朝部屋に入つて来るのだが、すぐカギを開けて外に出たがりました。Dちゃんはまずエレベーターに行きました。何度もエレベーターに乗るので、付いている大人はよその人からどれほど叱られたか。

でもお弁当は部屋の中で食べました。その子は電氣をつけたり消したり、家でもそれを自分でやらないと大変。そんなことをするうちに、D君は部屋の中で遊ぶようになりました。その後、四、五年生になつた頃、また外出するようになり、私は随分外出に付き合いました。どこまで行きたいかは分からないのだが、D君には分かつていて、ある程度外を歩くと戻つて来るのです。卒業するころには、スーパーで何か買って来て学校で食べました。

F そう、目的があつて外出したのね。

M そしてそれを繰り返して、部屋の中では楽しく遊んで。

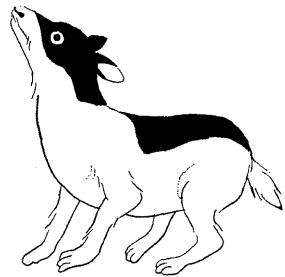
F 電車の名前を書いたり、物を作ることに

興味が向かつたのですね。

M Y君も六年生くらいるとき、随分学校の中で遊んで、字や絵でコミュニケーションをつけて、以前とは違つてきたんですよ。

F そうすると外へ外へと向かつた人が、長い時間かけて、やがて落ち着くようになったのね。そのためには特定の人との心のつながりができて来るのが大切なのでしょうか。

M そう。Dちゃんの場合は、中学でも高校でも、皆から愛されています。



F おとなたちが子どもと良いかわりをしてい
と、そうなるのね。

M 僕は外に行くのが好きじゃないから、子どもと外
に行くとはらはらすることがあるけれど、次第に見通
しがついて、この程度で学校に帰って弁当になるとい
うように分かることがしばしばでした。僕は学校の中
でやる保育を主にして考えて来たけれど。

F 子どもによっては、こわいことがとても多くて、
他の子どもには恐怖を感じる子もいましたが、外へ逃
げるのではなく、おとながおんぶしたりして、こわい
ことを学校の中で乗り越えました。

一般論では言えない

F あるとき、普通の幼稚園の先生が見学に来て、保
育に入りました。そのとき、彼女が腰を下げて、手を
広げて走って来る子を迎えたような、挑んだような、
阻止したような、腰を下ろしてパッと手を広げまし

た。その子が、ぎよっとして方向を変えて逃げたんで
す。子どもによっては、迎えられたと思う子もあり、
阻止されたと思う子もあり、随分違うわけですね。

その子の場合、動きが凍ったようになりました。私
はその先生のやり方はこの子には強すぎると言いまし
たが、一般論じゃないのよね。子どもによって受け取
り方が違うのだから。その人にどっちが必要なのか分
からないけれど、人間関係の中で、懐に飛び込もうと
いう子もいるし、それが壁になっっている場合もある。
その人との関係が大切だということを思います。

普通の幼稚園や保育園ではどうでしょうか。

M 外に遊びに行つて家に入るとき、ドアのところ
でバンバン戸を叩いて泣くとかは二、三歳で多くの子に
起こるんですね。帰りたくないとか、おうちに入りた
くないとか。すると「多動」と診断される。ことがしば
しばあります。学校の中で多動という場合には、教室
に入らない、校庭に行きたがる、一部屋に留まらない

で部屋から部屋へと動く。

F だから広いおうちみたいなものと考えればいいのかね。学校という枠、教室という枠を超えることが大変さのもと。

M ただ歩くというだけじゃない。

F 歩くということに伴うこと、歩けるようになったとたんに、こういうことが起こるのね、現代は。

M これも相対的なことで、保育室の中に留まらないで、職員室にも、応接室にも行きたい、それぐらい園の中じゅう行きたい。枠という範囲の考え方。この前話したように、枠の中で動いていれば、園の中で循環しているなら、いいが。それができないというのが現実の幼稚園保育じゃないかな。担任とか、自分の部屋からはみ出して行く子をあまり問題視したら困るでしょう。

F 園の中なら危険が無いのだから、自由だと思おう。教材置き場に行ったり、応接室に行ったり。客が来て

いるときには「こんにちは」と言うことを教えるチャンスと考えられるでしょう。

M それが普通にはそう考えられない。園や学校の枠を超える子の場合には、多動と言われて、これは普通の範疇ではないと言う話になってしまうのです。

F ある青年の母親の話に枠に突き当たったときにだれかに抑制してもらいたいのではないかという議論になりました。本人自身がどこかで自分を押さえてほしいと心の中で叫んでいるという議論でした。

M あんまり早くそれを言うとか、きつい保育をすることになるのではないか。それも止めてもらいたいと思っているとやうふうにとらえると問題です。幼児期によく付き合っていると青年期になって分別が出るとやうのが前回の話の子どもでした。だけどそうならない子もいる。それは社会との相対的な問題でしょう。それだから、幼児期からコントロールせねばならない、子どもに寄り添ってどこまでも行くということが

あつてはならないとなると考え過ぎです。

F もちろん考え過ぎよ。

M そう考えると考え過ぎで、このような資質の子には苦しいことになるでしょうね。だからと言って子どもだけの意志でやって行くことはできない。一緒に外出する人が、その場の状況で、その子の行動と自分の行動と併せて意味をつかんでいることが大事だと思う。自分にはそれ以上できないということまで付き合い合おうとすると自分の力を越えることになる。その幅の大きい人と小さい人がいるのではないだろうか。

F やれないことを壁として受け取るのか、お母さんが好きだから、先生が好きだからあの人がやれないというならやらないという情愛との兼ね合いがあると思います。子ども時代の全体を通して、人の心に触れ、人を好きになり、人からも愛されることを経験するのだでしょう。その基礎のうえに皆とやれる人になるのだと思います。

M 第一回で問題にしたのは、外に行くというより、歩きたいということ、そこを受けとめ、自分自身（自己）を確かにして行くことについて考えました。そして今回は外へ外へと向かう歩き方の子どもについて、私達自身の悩みについても合わせて話しました。



撮影・平野 清

ある日



いま、子どもたちは

「今どき」の親、「今どき」の子ども

伊藤 亜矢子

「今どきの子ども」という表現には、どうしてもなじみません。子ども達を見ていると、いつも外からの刺激をみずみずしく吸収しながら成長していく存在に映り、今もいつも変わらないように感じます。楽しければ笑い、悲しければ泣く。辛い思いをすれば自信を失うし、自尊心が傷つくこともある。周囲との関係の中で、自分なりの処し方を身につけ、自己を形成していく。乳幼児はもち

ろん、小学生でも中学生でも、子どもの純粹さと人がつくられていくプロセスはいつの時代も同じように思えます。

それでも我が身を振り返れば、確かに「今どきの」母親だとつくづく思います。流行のファッションナブルな母親でもないし、お受験ママでもありません。それでも、ああ今どきの母親だなあと思うのです。

多忙な大学での校務や講義、自分の研究、学生の研究指導、原稿書き。いくらでもすることのあ
る毎日です。帰宅しても、書きかけの論文や原稿
のことは頭から離れません。ご飯をよそいながら
章立てを考え、歯を磨きながら次の会議や研究の
ことを考える。そんなことで頭はいつもいっぱい

い。ふと気づけば、二歳の我が子が足元でわめい
ています。でも「車は急に止まらない」。フル回
転している思考にブレーキをかけ、我が子の言葉
に頭を切り換えるには数秒かかります。子どもの
叫んでいることの意味が飲み込めるまで、娘はい
つも四、五回は同じことをわめいているよう
です。無意識のうちに、「ああ、お水をこぼしたの
ね」といい加減にオウム返しに返答をしつつ、娘
の言葉は右から左へ抜けていく。「えっ?」「今お
水こぼしたっていった?」「あれ?」と気づいた
時は後の祭り。びちょびちょになってお腹を出し

ている娘にやれやれ。そんなことばかりなので、
娘はいつでも人一倍の大声で、必要以上にけたた
ましく要求を繰り返します。言語表現が巧みにな
った最近では、「キイテナイネエ」などとシビ
アなコメントを呟いたりしています。

昔の母親のイメージといえば、夜なべをして手
袋編んでくれるお母さんでしょうか。睡眠を削
り、自分のことは二の次三の次にして、しっかりと
と航空母艦のように子ども達に必要なことをして
くれる。次の時代を生きる子ども達を舞台裏で
しっかりと見つめ、子ども達のできないことを
淡々と、黙々としてくれるお母さん。そんなイ
メージがあります。

けれど我が身を振り返れ
ば、いつまでたつても自分
の都合優先です。もちろん
社会人として仕事の責任も



あります。加えて、愛着ある研究も手放せません。学生やクライエントも待たなしです。子どもにとつての今が今しかないように、私と私の研究にとつても、それ以上にクライエントや学生にとつても、今は今しかないのです。

自己主張の強い娘に、「主張したいことがあるのはいいことですよ」「今は、何でも親が先回りして、何を主張して良いかも分からない受け身の子が多いのですから」と保育園の先生は慰めてくださいます。けれど内心、何の慰めにもなりません。娘の主張の「連呼」は、いつも仕事優先でうわの空の母親がつくりあげている行動に他ならないからです。

「何を主張して良いかも分からない子」と「必要以上に主張する」娘。考えてみるまでもなく、結局は同源に思われます。前者は、子どもの要求を待てない親の事情や都合があり、子ども抜きで物

事が進んでしまう。後者は、子どもの要求どころではない母親が、母親の都合優先でどこかへ行ってしまうので必死にわめく。子どもが二の次なのは同じです。

子どもの行動は素直です。娘も、孫かわいさに精一杯遊んでくれる祖母がいると、母親には目もくれません。もうニコニコ顔でキヤッキヤと祖母と遊んでいます。保育園でも遊びが長続きしないと言われがちな我が子が、こんな風に遊びに熱中しはしゃぐこともあるのかと驚き、焦りと嫉妬を感じます。負けずにたまには遊んでやろうとしても、どうせ片手間と思われているらしく、すっかり遊んでももらえません。まったく情けない母親です。

少しでも一人で遊んでくれればこれ幸いと家事や仕事を片づけ、寝る前の読み聞かせも、一分一秒でも早く寝てほしいと願う毎日です。そうしたその場のぎの育児に二年間もさらされてきた娘

は、とうてい母の遊びは信じるに足りず、いつも全力投球の祖母には及ばないと固い判断を下しているのでしょうか。

とにかく一分でも仕事や家事をとというのが私の社会適応なら、そんな母親には期待せずさっさと一人遊びで満足し、そこで満たせぬ欲求は、遊んでくれる祖母との間で満たすのが娘の必死の適応です。その証拠に、祖母と過ごした日の夜は、本当に満たされ、満足そうな表情です。二年の月日はあまりに長く、たった二歳であっても自分の置かれた養育環境にしっかりと適応し、すでに娘なりの周囲との関係のとり方を身につけていることが分かります。

このように、「今どきの子」がいるとしたら、それは「今どき」の親の鏡映であり、親を中心としたその子の置かれた養育環境への適応なのだろうと思います。当然のことですが、母親自身を取り巻

く環境も含めて、「今どき」の世の中と、そこに生きる大人達の行動そのものが、子ども達の姿の背景に見え隠れしているように思えてなりません。

確かなもののない時代。リストラや日本経済の不透明に象徴されるように、これまでの当たり前が通用しない時代。食物汚染など物質面での生活背景も含めて、大人自身が自覚のないままに、前例のない「今どき」に翻弄されながら生きているように感じます。

けれどそんな社会を変えることが難しいように、家庭を変えることも、何十年か生きてきて「今どき」を必死で生きた親を変えることも、相対に困難なことです。変われないのはお互いさまです。あれが悪いこれが悪いと言ってもきりがありません。

ただひとつ、こうした子ども達の背景にあるさまざまな環境を視野にいれて子どもを理解するこ

とは、とても大切なことのように思えます。

やかましいほど声が大きく、絵本も一ページ毎に「読んで！読んで！」とけたたましく要求し、それでいて、あれやこれやと落ち着き無く自分のペースをつかめない。そんな娘の行動が、うわの空で相手する親のペースに翻弄される毎日の結果であるように、どの子にも、子どもには子どもの事情がきつとあるのではないのでしょうか。

親子関係や教師—子ども関係も含む、広い意味での環境が子どもをつくり、環境と子どもの不適合が問題を発生させる。コミュニティ心理学や学校臨床心理学の分野では、そのような「環境と人とのマッチング」という考え方が重視されます。

例えば、のんびりとゆったりした時間の流れの中で育ってきて、自分の中に流れる時間の流れで動く子どもは、園での沢山の子とも達で一緒に一斉に何かをする状況や定められた時間内に何かを



する状況に、なかなか馴染めないかもしれません。これは、その子の持ち味と園の環境とのミスマッチともいえます。集団で一斉にという志向が強い場面であればあるほどミスマッチは高まります。社会性のない子として問題視されるかもしれませんが、けれど逆に、一斉での課題の少ない場面であれば、ミスマッチは目立たず、問題のある子として事例化せずにもすむかもしれません。同様に、うわの空の母親に振り回されている我が子であれば、集団でのあわただしいスケジュールには案外適応できても、むしろ家庭よりもゆったりしたじっくり何か取り組める時間に出会った時に、

そわそわと落ち着きのない行動が目立つかもしれません。

こうして子どもが慣れ親しんだ家庭環境と園での環境の違いが、子どもの「問題行動」を顕在化させる場合もしばしばあります。問題行動を呈する一人の子どものために環境を大きく変化することは難しいことですが、場面の工夫や、よりマッチした環境への移行などによって、その子の持ち味が生かされる可能性もあります。

うわの空の親も、一日一回何分間かは親がまともに相手をしてやる工夫をする。要求行動を押さえるのではなく、応答性の高い対応を周囲も行なう。一斉での課題の少ない場面をもうける工夫をする。そんな風に、園と親との協力で実行可能な小さな工夫は沢山あるかもしれません。そうした工夫は確実に子どもの行動を変化させます。行動の背景にある環境要因を少しでも変化させれば、

子どもの行動は自ずと変わるからです。

もちろん我が身を考えれば、現実にはそれがどんなに難しいか明らかです。けれども、すぐにできることはなくとも、子どもの行動とその背景にある環境との関係を理解することで、子どもの行動の意味が明らかになり、それを受け入れやすくなったり、対応に余裕が生まれたりするように思います。

「今どき」の環境が子どもをつくり、周囲の変化が子どもの行動を変化させていく。

しなやかな身体に象徴されるように、子どもの吸収力と変化成長する力は無限です。園や家庭で、小さな工夫が発見され、誰かが少しだけ実行すること。不埒な母親としては、身の恥をさらし自分を棚に上げてのお話で恥ずかしい限りですが、そうした力の大きさを学校現場での心理臨床実践を通して痛感します。

(お茶の水女子大学)

ピエール・ブルデューの『実践感覚』を読む

(2)ブルデュー社会学における

「主観主義」と「客観主義」の超克 — 主知主義批判 —

安田 尚

今回は「第一部 序言」と「第二章 客観化を客観化する」、「第二章 主観主義の創造的人類学」を読んでみることにしよう。まず、「序言」では第一部全体の主要な論点が語られ、第一章では「客観主義」が第二章では「主観主義」が扱われる。

主観主義と客観主義Ⅱ 和解しがたい対立、

しかし不可欠な契機

まず「序言」は、次のように書き出されている。

「社会科学を人為的に分割する様々な対立のうちで最も根本的で破壊的な対立は、主観主義と客観主義の対立で

ある。この分裂がまったく変更されることなく絶えず再生される事実そのものは、この対立しあう認識様式が社会現象学にも社会物理学にも還元できない、社会的世界の科学にとって不可欠であることを証言するに十分であろう」(三七―三八頁)。

つまり社会科学の場合、主観主義と客観主義の対立や分裂は、ほかの対立にとって替わられることなく、絶えず繰り返り現れるというのである。そうした対立は、社会学では「個人と社会」、「方法的個人主義と方法的社会主義」、「個人主義と総体主義(ホーリズム)」の対立として語られて来た。また、「ミクロとマクロ」の問題とも言われている。さらに古くは、「社会唯名論と社会实在論」の対立である。

すなわち「社会唯名論」は、経験的にその実在を確認できるのは人間の意識と行為だけであり、社会は単なる名目にすぎないとする。たしかに、その眼で「社会」を見たことのある人はいないであろう。これに対して「社

会实在論」は、個人の意識と行為を超えた何らかのモノ(「社会」、「構造」、「システム」など)の実在を主張する。要するに、社会科学における論争の背後にいつもひかえている根本的な対立は、この相解しがたく見える二つの認識様式(「主観主義」と「客観主義」)の対立なのである。

しかしブルデューにいわせれば、この二つの認識様式は社会的認識にとって欠くことのできない契機である。どちらか一方だけが、正しい認識様式だというわけではないのである。さて、こうした社会科学にとって不可欠な二つの認識様式の成果を「保持しながら」、「その敵対関係を乗り越える」にはどうすればよいのだろうか



(三八頁)。そのためには、ともに「学問的認識様式」である「主観主義」と「客観主義」の認識論的前提を問う必要がある。この二つの認識様式は、ともに社会科学が生み出した「学問的認識」であり、行為者が実践する際に行っている「実践的認識」とは別物である。同じ人間の実践を対象にしているとはいえ、「学問的認識」(主観主義と客観主義)と「実践的認識」は、まったく異なった認識論的前提にたった認識なのである。

「主観主義」とは何か？

さて「主観主義」とは、いかなる認識様式なのだろうか。ブルデューは、「主観主義」のことを「現象学的と呼ぶる認識様式」(三八頁)と表現している。それは、現象学がこの「主観主義」の極であり典型だからである。したがって「主観主義」は現象学の特質は、「定義上は考察されざるものであるが、身近な環境とのなじみ深い本源的な関係を考察し、たとえ『客観的』な視点か

ら見れば幻想だとしても、経験としては依然として全く確かなこの経験の真理を明るみに出すことにある」(三八頁)。つまり、たとえ客観的には「空耳」、「幻聴」であつても、それはその声や音が聞こえた主張する者にとつては「依然として全く確かな経験」なのである。現象学は主観主義はこの主観的世界のリアリティから分析をはじめようとする。現象学は、考察や学問によつて生みだされた対象を問題にするのではなく、あくまで主観的「経験の真理」を探求しようとする。いわば「初源の意識」に立ち戻ろうとするのである。だから、こうした意識は現象学では「定義上は考察されざるもの」とされるわけである。

「客観主義」とは何か？

これに対して「客観主義」の特質は、「個人的な意識と意志から独立した客観的規則性(構造、法則、関係の体系、など)の確立をめざす」(三九頁)ことにある。

個人の意識や意志を超えた、あるいはこれらには還元できない「客観的規則性」や傾向性を発見しようとするのが、「客観主義」である。だから、現象学的社会学（A・シュッツ）が、社会学を「前科学的経験の科学的記述と同一視すること」も、エスノメソドロジー（H・ガーフィンケル）が行為当事者の「説明についての説明」とすることも、客観主義は退けるのだ（三九頁）。つまり、現象学的社会学やエスノメソドロジーは、（学問の手垢がついていない）「純粋な意識」、「前科学的経験」の替わりに、結局は現象学的社会学やエスノメソドロジーの学問的所産である「二次的構築物」を提示しているのだ。

さらに、客観主義は「社会的世界のドクサ（doxa）的経験を可能にする特殊な条件とは何かという忘れ去られた問を、少なくとも客観的には登場させる」（三九頁）。ここでいう「ドクサ」とは、「本当なのか」（認識論的吟味）とか「正しいのか」（倫理的・道徳的妥当性）

といった反省や根拠づけを欠いた、素朴で自然発生的な観念、漠然たる思いのことであり、「通念」や「億見」^{おんけん}と訳される概念である。つまり、我々が主観的な経験に意味を与えることができるのは、「個々人の意識と意志から独立した、∴（人々が共有する）恒常的な関係システムを参照する」からである。この「恒常的な関係システム」とは、「コーディング（暗号化）」とデコーディング（暗号解読）で用いる暗号^{シニナル}のことである。すなわち、客観的な言語体系や意味体系を我々が共有するから「ドクサ的経験」に意味が与えられるというのである。

ついで、ブルデューはそれぞれの認識様式の問題点や限界を指摘する。一方の主観主義は、「生きた」経験、一時的経験を自明なものとしているため、その記述に終始している。したがって、何故こうした経験が成立するのかを問うことができない。「実践」の社会的成立条件、つまり「客観的構造と身体的構造の一致」（第三章では、「構造とハビトゥスの一致」）の社会的条件を問

うことができないのである。要するに、主観主義は「主観的経験」の社会的成立条件を客観化しえないというのである。

これに対して、客観主義は個人的意識や意志を超えた「客観的規則性（構造、法則、関係の体系、等々）」の確立をめざすものであるが、「客観化関係（対象と距離をおくこと）」の「客観化」、すなわち「一次的経験に距離をとり、その外に立って」この一次的経験を対象化すること自体の「客観化」を怠っている。

その結果、客観主義は主観主義の明らかにした「生きた意味」と自らの解明した「客観の意味」との関係を理解することができない。つまり、「主観の意味」と「客観の意味」の関係を問題にできないというのだ。たとえば、「そんなつもりじゃなかったのに、こんなことになってしまったのは、何故か？」と、客観主義は問うことがないのだ。すなわち、「どんなつもり」≡「生きられた意味」は、客観主義にとって既に退けられた問い

であり、「こんなことになってしまった」≡客観的帰結だけが問題にされており、まして両者の関係など問うべくもない。したがって実践を解明しえないというわけである。

つまり、主観主義も客観主義も自らの認識論的前提を客観化しえない弱点をもつというのである。

「主観主義」と「客観主義」≡見かけ上の対立

ついで議論は展開する。これまで「対立」とされてきたものが実は、見かけ上のものにすぎないとされる。すなわち、主観主義と客観主義という「二つの認識様式の見かけ上のアンチノミー」を克服し、両者の成果を統合しうるのは、学問的実践を「認識主体」についてのもう一つの認識に従わせる場合だけなのである。つまり、主観主義も客観主義もいずれも一つの学問的認識であって、その前提である観察者と観察対象との関係の中で生ずる認識なのである。だから、ブルデューは次のように

この作業の意義を強調する。「このもう一つの認識（註1）は、主観主義であれ客観主義であれすべての理論的認識に内在する限界（註2）に対する本質上批判的な認識（註3）であって、それは学問的認識によって隠蔽される問いを敢えて問うことによって、厳密な意味での科学的成果を生み出すのだ」（四〇頁）。

こうして、一見すると主観主義と客観主義の和解しがたい対立と見えたものが、実は「学問的認識」とその対象である「実践」との関係の問題であることが明らかとなる。したがって、この対立Ⅱ「見かけ上のアンチノミー」は、真の対立である「実践」の論理と学問的認識Ⅱ「主知主義」との対立に置き換えられる。

客観主義がよくやるように、実践当事者の「一次的経験」やその主観的表象と手を切り（第一次的認識論的断絶）、実践者の「常識」に対して「学問的認識」の優位性を主張してもこの対立は克服しうるものではない。いわゆる、「日常意識」と「科学的認識」を切断してもそ

の解決にはならない。なぜなら、「観察者は実践を解釈することによって、（それとは知らずに）自らの対象との関係の原理を対象の中に持ち込む傾向があるからである」（四〇頁）。

だから従来、「余暇（スコール skole）」の知として賞讃されてきたもの（プラトン『テアイテトス』）、すなわち観察と思考を専らにする学問的認識、研究的営為の最大の長所が、実は最大の弱点となるのだ。こうした真理の「認識と伝達」に専心するという学者の特権、すなわち「社会的空間の高い地位から眺める」と、「社会的世界は、上からも遠くからも眺められる見世物、お芝居Ⅱ表象」になる（四一頁）。



この点、当事者の「経験」や「表象」に最も近く身を寄せていると自負する主観主義といえども、この学問的認識の陥穽から免れることはできない。主観主義もまた一つの学問的認識だからである（註4）。

なぜブルデューは、こうした点をくり返し問題にするのか。それは、学問的認識をおとしめ実践当事者の経験や表象を持ち上げるためではない。実践を真に科学的分析の対象とするために学問的認識における認識論上の障害を自覚し、乗り越えようとするためである（註5）。

そのためには、くり返せば観察・認識対象と観察者・学者との客観的・主観的関係を対象化する（＝第二次的認識論的断絶）必要がある。

第一章「客観主義」の認識論的前提

さて、「第二章 客観化を客観化する」では、「客観主義」が分析される。主要には、①言語学（ソシュール）

と②構造人類学（レヴィ・ストロース）がとりあげら

れ、対象との関係に持ち込まれる「客観主義」の利害関係が明らかにされる。

客観主義の認識論的前提を明らかにするためには、その源流であるソシュール言語学にたちもどる必要がある。ソシュールは「コミュニケーションの真の媒体は」、感覚においてとらえうる音声である「パロールではなくて、言語の生産と解読を可能にする客観的關係体系としてのラングである」と主張する。つまり、パロールに対する「ラングの優位という根本テーゼ」をソシュールは提示する（四五頁）。いいかえれば「ラングはパロールの理解可能性の条件としては第一義的である」。つまり、「ラング」（＝システム、構造）によってこそ、話された言葉＝「パロール」が理解できるといっているのである。さらにソシュールは、「『視点が対象を創造する』とも言っている（四六頁）。「視点」とは、観察者の対象との関係のことである。

言語学は、言語活動にいかなる「視点」、つまりいか

なる「関係」をとるのであるうか。言語学者は「理解する・ために・理解することに懸念なあまり、この解釈的・的・意・図・を・行・為・当・事・者・の・実・践・原・理・に・し・が・ち・で・あ・り・」、話し手とちがって文法学者は、言語活動をコード化するためにしか研究しない（四七頁）。こうして生みだされた「形式文法」は、言葉が用いられる「実践の状況を括弧に入れ「棚上げ」（四八頁）にするので、言語の「現実的・用法は根こぎにされ、その機能を全面的に奪われる」（四九頁）ことになる。

つまり言語学の実践との関係は、端的に言えば、実践の中に文法規則を発見しようとする「関係」である。こうした「関係」が、対象である実践者の言語活動に投影されることになる。

前述したソシユール言語学の根本テーゼは、「あらゆる構造主義のあらゆる前提」となっている。そしてその弱点は、ラングとパロールを本源的に分割し、この「二つの実体間の関係をモデルと実行、本質と実存の関係と

してしか考えることができない」（四九頁）点にある。したがって構造主義は、構造を「本質」として実体化し、人々の実践をそれに規定された「実存」として対置することになる。

さて、民族学は何を対象に投影するのであるうか。構造主義的人類学の立場に立つ「民族学が自分の「研究」対象ととりむすぶ関係は、異邦人（「よそ者」）の関係である」。なぜなら、「彼は観察される空間に自分の地位をもたず、…そこに自分の地位をつくりだす必要もないという事実によって、社会的実践における現実的な役割から排除されているからである」（五一頁）。こうした研究者は観察者の「主知主義は、研究対象の中に対象との知的関係を導入し、行為者の実践との実践的關係を、観察者の対象への関係に取り替えること」（五二―三頁）になる。

その典型的な例は、民族学における「親族関係の分析」（五三頁）に見いだされる。レヴィ・ストロースの

『親族の基本構造』(一九四九)は、稀にしか起こらない「母方の交差イトコ婚」(母の兄弟の娘との結婚)を

「規範」として描いている(五八―九頁、六〇頁)。ところが『構造人類学』(一九五八)になると、それは「モデル」、「構造」、「規則」とされ、人々の実践を決定する。『無意識的構造』に変質してしまう(五九頁)。

人々にとって『理想、価値、規範』(五五頁)ではないものが、実践の原理にされてしまうのだ。つまり、望ましい結婚の形態でしかないものが、現実の婚姻関係を決定する「規則」になる。学者のつくった理論的モデルが、実践の論理にすりかえられ、「横すべり」(註6)、「物象化」(五七頁)させられるのだ。(行為の理念型である「目的合理的行為」も同様といえよう。)

要するに、客観主義が対象に持ち込もうとする「知的関係」とは、対象(＝実践)の中に本質やモデルを、あるいはまた構造や規則を見いだそうとする学問的関心(野心)ということになる。

第二章「主観主義」の認識論的前提

さらに「第二章 主観主義の創造的人間学」では、サルトルに代表される「主観主義」が扱われる。サルトルは、行為を「自由な投企」、実践を「目的」による明白で意識的な方向づけとする「行為の哲学」を定式化した。それは、「持続する心的傾向や起こりうる事態」を認めないから、行為を「主体と世界」との「先例なき出会い」にしてしまう(六五頁)。

つまり、サルトルは「先例」とか「習慣」(＝「持続する心的傾向」)に支配されない、自由なその瞬間、瞬間の決断を人間の「行為」や「実践」としたわけである。それは知的エリート「自由」の自己認識であり、何物にも拘束されない飛翔する自由への憧れと言えよう。さらに、サルトルは想像的世界との対比においてのみ現実世界は、耐え難いものになると主張する。すなわち、「通念とは逆に、状況の厳しさや状況の課する苦し

みが『誰にとつてもうまくいく別の事態』(ここでは、革命的未來の意味)を考へるようになる動機ではないことを認めるべきである。逆に、別の事態を考へることができようになるのはじめて、新しい光がわれわれの辛さや苦しみを照らし出し、われわれはそれらが耐えがたいことだと決定するのである』(六五―六頁)。

このように、ブルデューはサルトルの『存在と無』の一節を引きながら、これでは「行為の世界」は「全く客観性を欠くもの」となり、「行為自体も自己欺瞞の戯れにすぎない」ものとならざるをえない、と断じている(六六頁)。こうしてサルトルの「能動的主義」は、あらゆる「惰性態」、既成態、あらゆる外的拘束を拒否するものとなる。とりわけ、「階級」||「条件と条件づけの集合、すなわち心的傾向と持続的な生活様式の集合」は拒否される。サルトルにとって「拘束」するもの、つまり「条件と条件づけ」である「階級」は無意味なものなのである。しかし、こうしたサルトルの主張も、

結局は意識と物質の二元論の間を往復・動揺するほかない。すなわちサルトルの場合、「内面性の外在化」、つまり「自由から疎外へ」「意識から意識の物化へ」と、「外在性の内面化」、つまり「疎外された集団の物象化から歴史的行為者の本来的実存へ」と往復・動揺の運動が繰り返されることになる。そして、「自由の死とその復活の壮大な想像上のドラマの果てに、意識と物質は最初の時点と同様に取り返しつかないほどに分離されてしまい、制度化または社会的に形成された行為者といったものは(……)決して確認されえないし、構築されることのできなかつたのである」(七〇頁、傍点―安田)。

つまり、サルトルの「能動的主義」では、制度や



構造によって生み出されるものを解明できない。したがって、その「自由な投企」は常に失敗、挫折に終わる

ほかなかつたのである。こうしてサルトル流の主観主義がその対象である「人間」に持ち込んだ対象との関係が明らかとなる。すなわち、「客観主義が学問の対象に対する学問〔者〕的関係を普遍化するのと同様に、主観主義は学問〔者〕的言説の主体が自己自身を主体として形成する経験を普遍化することである」。いわば、主観主義は知識人の自我信仰をその対象である「人間」に投影しているのだ。サルトルは『「惰性なき意識」、過去も外部もない意識の幻想に囚われた意識の専門人」(傍点―安田)であり、「つながり(係累)も根もない純粹主体」であることを希求したのである。

しかし、サルトルの主張にもメリットがないわけではない。それは「客観主義と主観主義の原理と賭け金(争点)が人間科学のつくりあげる人間観、すなわち学問の対象にして主体でもある人間観にあることをあきらかに

した」(七一頁)点である。

さて、この点は近代経済学も全く同様である。それもまたこの意味で主観主義なのである。近代経済学の客観主義的アプローチは、経済行為者の自由と意志を外的・機械的なあるいは内的な知的決定論に従わせようとする。またその主観主義的・目的論的アプローチは、その行為者の投企や将来的目的、将来的期待を先行要因に代えて立てようとする。こうして近代経済学のホモ・エコノミクスの経済行為論は、次のようなものとなる。すなわち、「選択行為を一方で……構造的(技術的・経済法的)制約に依存させ、他方では(経済行為者が)普遍的に意識的に設定する―あるいは普遍的原理に従うと想定される―優先順位に依存させることは、どう見ても理性の明証と『合理的計算』の論理的必然性に縛られた行為者に真理(すなわち客観的機會)への執着の自由を残すにすぎない。つまりこれは主観的思考」(七二―三頁、傍点―安田)にほかならない。

すなわち、近代経済学は、経済行為者の目的意識性を重視する目的論的経済主義（＝主観主義）と機械的原因を重視する機械論的経済主義（客観主義）のあいだを往復・動揺する。したがって彼等は「実践が機械的原因や意識的目的以外の原理をもつこと、狭い意味での経済的利益に従うことなしに経済的論理に従うこともあることが解らない」。ブルデューがこれに對置するのが「実践の経済学、すなわち実践に内在する理性」（八〇頁）、つまりはハビトゥスであり、実践の理論なのである。

（上越教育大学）

註

1 ここていう「もう一つの認識」とは、認識主体と認識対象との関係の対象化のことである。つまり社会科学の認識論的前提の批判である。

2 この「理論的認識に内在する限界」とは、いわば主知主義に

よる学問的認識の死角のことである。指さす対象に眼を凝らす余り、その指とその対象との関係や距離が見えない。

3 ここでの「批判的」とは、critiqueの本来の意味である決定的で死活的なという意味である。

4 この後でブルデューは、「学問的分析（主観主義であれ客観主義であれ）について分析されざるものは、社会的世界への学者の主観的關係とこの關係が想定する客観的（社会的）關係である。」（傍点―安田）と述べ、主観主義も同様の弊に陥っているとべている（四三頁）。

5 ブルデューは、「序文」において、「私は、観察者と観察されるものとの一般的關係を対象化しようとしたが、これが私の企ての主要な成果である」（傍点―安田）とその意義を強調している（二五頁）。

6 ブルデューは面白い例をあげている。「列車は規則的に二分遅れる」と「列車が二分遅れるのが規則である」のちがいである。「規則性」が、現実の「規則」へ「横すべり」する可能性があるのだ。

一学期始発の急ぎすぎた保育者

阿部 康子

九月四日(火)

一学期が始まって三日目の朝、園庭の築山では蟬を捕ろうと桜の大木に群れる子どもたち、砂場に水を入れて嬉しがる子どもたち、と園内の隅々に子どもたちの歓声と賑わいが戻ってきた。

保育室にも再び子どもたちの遊びが始まり、「お外へ行ってきました」と園庭へ出て行った、たつま、りょうへい、ゆうすけ、たかゆき、こうきは冒険小屋を中心に競争を始めた。冒険小屋から十メートル位離れた

位置に縦一列に並び、出発点から全速力で駆け、弾みをつけ、ロープを握って一気に駆け登り、橋を渡り、もう一方の開口部から飛び降りるというもので、その速さと、途中止まらないという二点が条件という。こうきはものすごい馬力でロープを手に駆け登るとあっという間に飛び降りてくる。なんといつでもこうきが抜群の強さで、得意満面である。そんなこうきに反発して、こうきがちよつとでもへまをすると、皆が「できんかった!」とはやし立てる。こうきは敏感に反応

し、泣きながら「今ちよつとだけだわ」と怒りをぶつける。

こんなやりとりは一学期後半には互いに収まっていたのに、とも思ひ、夏休みという空白の中で、友達との関係が一時とぎれて、よりどころがなくなつた為、こんな形で感覚を取り戻そうとしているのかもしれない、とも思ひながらとにかく登る時にロープを離さないこと、飛び降りでは膝を曲げて着地することなどに十分注意するように言い残して保育室へ戻る。

保育室では、昨日に続いて、さくみ、あやみ、みさとが登園するなりせつせと積み木を並べて床面を区切り、中に段組をしたり壁を作つたりして細く場を作り、それらを台所、私の部屋、寝るところ等と楽しげに家を作っている。その一角にれみが座り、電話機を手に「プーッ、プーッ、プーッ」と口で音を出すと、さくみが「お話中だよ」と応じる。今度はれみが音は出さずに電話機に耳を当て、「やつぱりお話中だ」と言うとみさとが「長いお話だね、もうすこし後にか

れば」と言う。それをきいてあやみが「れみちゃん、どこにかけてるの」と聞く。れみ「分かりません」……で四人は大笑いをする。このやりとりが気に入つたらしく、四人は何度もこの電話の会話を繰り返しては大笑いをする。

保育室はここでも、四人の子どもがお休みの空白感を埋め合つているように思え、電話のお話ごつこの行方を見ることにした。

しばらくするとれみとさくみがまごことコーナーから指人形の青い鳥と蜜蜂を持つて二人で会話を始めた。「蜂さんこんにちは」「こんにちは、鳥さんお元気ですか」「遊びにいきましょう」と至極簡単なものであったが、あやみが「面白い！」と手を打つて見る。その様子を見て、近くで恐竜を描いていたりようたが、面白そうと「僕も入れて」と仲間入りする。園庭へ蟬捕りに行つていた、ななこ、さとこ、あやかが保育室に戻つてきた。三人は「なにやつとるの?」とお話ごつこの賑わいに吸い寄せられていった。

私は、ななこ、さとこ、あやかたちが、一学期、お花の本、なぞなぞブック、お化けの話など、描きためたものをホッチキスで止め、絵本と言って楽しんで来たことから、ひよつとしたら、れみ、さくみの指人形を使つてのお話ごっこから、何か生まれるかもしれない、小さな、ほんの少しのペープサートでもいいな、と思ひながら成り行きを見る。

しばらく青い鳥と蜜蜂の会話を見ていたあやかが、「わたしピクニックごっこする、れみちゃんやろう」「わたしピクニックごっこする、れみちゃんやろう」と誘う。近くにいたあすかが「わたしやる」と二人で積み木の家の隣のままごとコーナーへ入つていった。それを見たれみ、あやみも「わたしもやる」とままごとコーナーへ。残つたさくみ、みさとは、れみ、あやみの姿を目で追ひながら「どうしてやめる?」とぶつぶつ言う。一人だけになった積み木の家に空間が広がった。ちよつと淋しさが漂つた時、さとこが「入つてもいい?」と仲間入りする。二人はさとこを歓迎。さとこはれみに替わつて青い鳥の指人形を手にはめ、

蜜蜂のさくみと会話を始める。「私おながが空いたけど」「虫さんはあつちにいます」「一緒に食べに行きましよう」と、次第に青い鳥と蜜蜂の物語を演じるようになった。「面白い!」とみさとが手を叩く。楽しい雰囲気再び戻つたが、何回も繰り返すうち「うさぎと亀の話にしよう」とさとこが言い出し、紙にさとこはうさぎ、さくみは亀を描き、アストロ棒(広告紙を巻いたもの)に貼つてペープサートを作つた。劇場ごっこをやろう」ということになつたが、降園時間十一時三十分という今日は、もうすでに十一時を回つている。明日やろうね」と約束して今日は終わった。

九月五日(水)

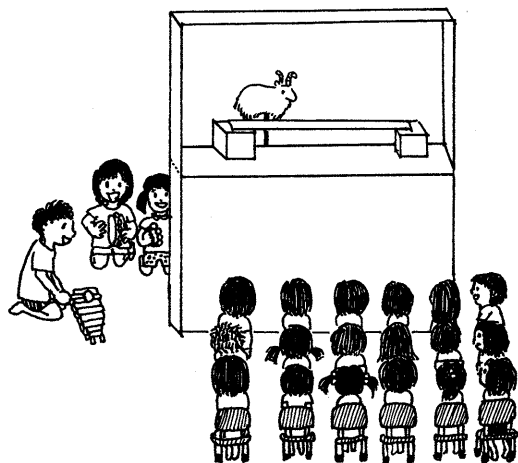
さとこ、さくみの二人は再び積み木の家を作り、昨日作つた「うさぎと亀」のペープサートで遊び始めた。保育者が二人に「お友達と見にきていい?」と聞くと、「まだ練習中」と言う。そしてなかなか始まらない。どうしたのかと聞くと、さとこが「さくみちゃ

らよく注意してね」と声を掛け、部屋へ戻る。

がらがらどんいかに、と見ると、なんとゆうき、てつや、りょうた、ことむが積み木の舞台で演じているではないか。さとことたちは？ と探すと、さとことさくみは見物人となって応援しているではないか。保育者の胸の中は「どうしてさとことさくみはやっているいの、なぜ」の思いが広がった。そんな保育者の思いをよそに、ゆうすけ、たつま、こうきたちが「やらせて、やらせて」とペープサートに仲間入りし、役を交代しながら次々と降園時間まで続けられた。今日の思いがけない成り行きに、保育者としての私は「うさぎと亀であったらよかったのだろうか、私の中に」がらがらどんなら、皆が知っている。今をチャンスに皆で楽しんでほしい」という思いが働いたのは確かなのだから……と、自分を責めながら。

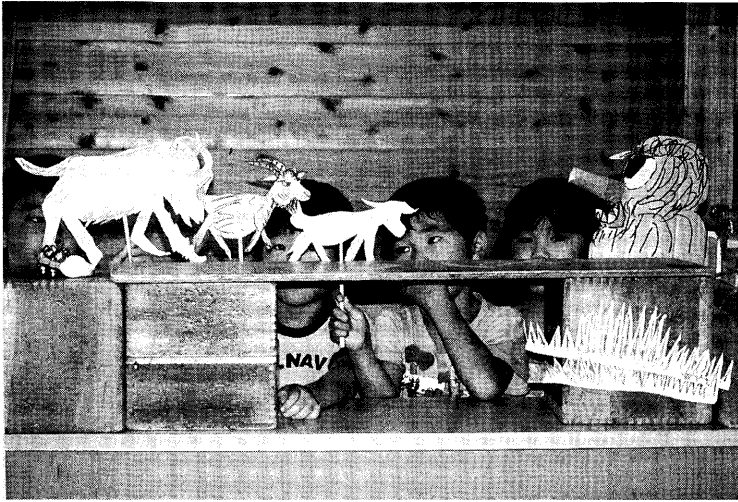
九月六日（木）

たつま、ゆうすけ、こうき、りょうたは朝、登園す



▲小さいやぎは鉄琴の高音で、中やぎは鈴で、大きいやぎはタンバリンで音をつけることになった。

るなり、「がらがらどんやろう」と昨日の積み木のステージに腰を掛けて話し合いが始まった。私は他用でその場からしばらく離れていたが、部屋へ戻ってみると右の図のように舞台と客席が設けられ、年少組さんが見物客として並べられたすに腰掛け、「がらがらどん」の始まるのを先生と一緒に待っていた。



▲2日目の舞台の様子

ゆうすけの提案で「やぎが橋を渡る時の音を出そう」ということになり、小さいやぎは鉄琴の高音で、中やぎは鈴で、大きいやぎはタンバリンで音をつけることになった、ということであった。ゆうすけはさくみとみさとに「中やぎ！ 鈴だよ。大きいやぎ！ タンバリン」と声を掛けてやぎの出番を知らせる。自分では小さいやぎの鉄琴を打ち鳴らす、とすごく満足そうな表情で演出を担当。絵を動かす人には、たつま、こうき、さとこ、りょうたがあたり、たかゆきは「そうだ！ 切符があるわ」と、「ちけつ」と書いた紙をどんどん作って、「はい！ 切符」と言いながら見ている人達に配っていた（昨日気になっていた、さとことさくみのうさぎと亀については、今日この二人が参加している姿から、一応よかったのかもしれない、と何も言わないことにした）。

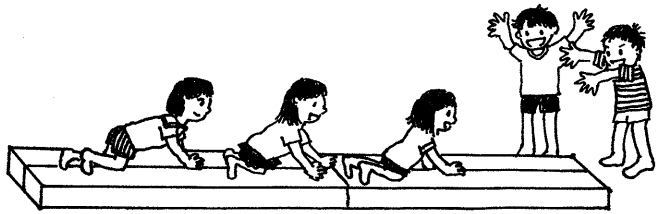
ストーリーはきちんと語られていないが、絵が動くこと、物語がだいたい分かっていることで、年少さんに何となく分かってもらえたようで、三回もアンコー

ルを受け、嬉しい様子であった。気をよくした子どもたちは、役を交代しながら演技、チケットも、りょうへの発案で絵入りのものになっていった。

そこへ、ゆうきが登壇してきた。ゆうきは部屋の様子を見て、第一声「なんであんなところで（がらがらどんを）やっどる」と、私に全身で怒りをぶつけてきた。「うん、そうか、ゆうき君は積み木の方が好きだったのね。でもたつま君やりょうた君たちも、小さいお友達に見てもらうにはどうしたらいいかな、と考えて新しい舞台を作ったのよ、ゆうき君も一緒にやろうよ」となだめながら誘ったが、「いやだ！」と言う。「ゆうきの作った舞台でやりたい！」と言い張る。この様子を新しい舞台から眺めていたりようたが、「こっちの舞台でないとダメ！」と叫ぶように言いながら私とゆうきの間へ割って入ってきた。ここから二人の喧嘩が始まった。二人とも互いに譲らず、自分の言い分を言い張って聞かず、揚げ句泣きながらつかみ合いとなってしまった。居合わせた子どもたちも二人

の勢いに驚き、眺めている。私はどうこの事態を解決すればよいか心底困ってしまった。とにかく心を変えてなんとか二人の気持ちを転換させることはできないものか、皆ががらがらどんになって遊ぶのはどうかと考えた。

そこで、「ねえ、リズム室へ行って皆でがらがらどんになって遊ぼうよ」と子どもたち呼び掛けリズム室へ。皆で大型積み木を並べ、高さは、長さは、と声を掛けながら一緒に並べ、橋に見立ててそれぞれがやりたい役になって遊ぶことにした。初めはトロール役になる人がおらず、保育者（私）がやることになったが、二回目からは、わたる、ゆうす



▲リズム室で皆でがらがらどんになって遊ぶ

け、たつまも名乗り出て、私は小さいやぎグループで橋を渡った。ゆうきもりようたもトルル役になったり大やぎになったり、初めは恥ずかしがっていたさとこ、さくみ、みさと、ななこ、あやか、れみ、あすかたち女の子も大声を上げながら橋を渡り、トルルと戦う。

大きいやぎがトルルと戦い、無事橋を渡り終えると、トルルとの戦いを見守っていた中やぎさんグループも小さいやぎさんグループもワツと大喝采！大喜びである。こうして、何回も役を替わり、クラスの子ども一人一人全員が面白かった！皆一緒に面白かった！と、ペープサート「三匹のやぎのがらがらどん」を自分で演ずるという体験を満喫して終わった。

保育者として

新学期、子どもたちも保育者も、互いの関係にちよつぱり距離を感じながら始まったこの時期、偶然生まれたさとことさくみのうさぎと亀のペープサートからがらがらどんへと変化をさせていったことへの反

省は大きい。さとこ、さくみの思いが熟すまで待つべきであったのか、二人の間でうまくいかず終わったらそれでもよかったのではないか、保育者のお節介がすぎたのではないか、という思いである。

しかし、クラス全体で分かり合っているがらがらどんに変わったことで、他の子どもたちへとこの遊びが広がり、そしてそこでは舞台と客席を用意する、音を入れる、観てくれる人をお願いに行く、切符が要ることに気が付き慌てて切符を作る、といった、子どもたちから今やっている遊びをよりそれらしくしようと様々な工夫が生まれてきた。

また、ゆうきとりようたの意見の違いからペープサートは一時中断となったが、自分たちが演じるといった別な世界で遊び、皆で心配したり、大笑いをしたりした中で、少し幼稚園での生活の感覚を取り戻せたのではないかと思っているところである。

(愛知双葉幼稚園)

タネまきと間引き

徳野 雅仁

九月に入ると、秋のタネまきシーズンがはじまります。播種適期はそれぞれに異なりますから、その年の気候の変化や、気象状況に注意しながらタネまきを行います。とくに、結球させるハクサイやキャベツ、ダイコンはまき遅れないようにします。また、関東南部を例にとると、ソラマメは十月中、下旬に。サヤエンドウは十一月上、中旬にまき、小苗で越冬させるようにします。マメ類は早まきすると冬までに苗が大きくなりすぎて寒害を受けやすくなり、遅すぎると冬までに根を深く張れず、寒さや乾燥被害を受けて冬を乗り切ることができません。

土壌に弾力があり、団粒構造が見られる自然栽培実践地や、有機栽培を行ってきた畑では、秋は無肥料栽培を試みる良い機会です。葉菜をはじめソラマメ、サヤエンドウ、ダイコンも耕さず草を刈りとるだけでタネまきができ、よく育ちます。

タネまきは、雨後に行うのが理想ですが、雨がなくても覆土したあとと土を押さえておくと、毛細管現象で地下の水分が上昇して土は乾きません。

タネはできるだけ新しいものを。とくにニンジン、チシャ、ネギは短命種子で、採種後一年経つと発芽しません。また、タネには光を感じると発芽が促進する好光性種子と、光を感じると発芽しない嫌光性種子があります。コマツナなど小さなタネほど好光性種子であるため、小さいタネはタ

ネが隠れる程度に薄く覆土し、ホウレンソウ、フダンソウなどは五ミリ、マメ類はやや厚く十ミリほど土をかけます。

播種後に土の乾燥を防ぐ方法としては掌で表土を押さえる以外に、まき溝部分を畝の表土より二センチほど低くしておく、この部分の乾燥は一層避けられ、発芽まで土壤水分を保つことができます。

九月上、中旬まきでは、ホウレンソウやダイコンなど、いずれの野菜も春まきものより子葉が大きくなり、生長も早いですが、これは地温が高いことによるものです。従って、この時期は、苗が混み合わないよう、徒長する前に早めに間引いて、しっかりとした苗に育てます。

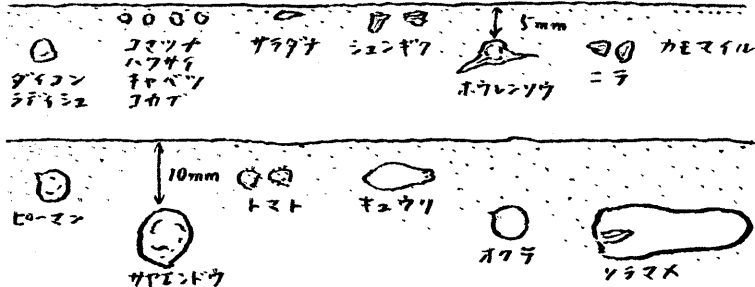
間引きのコツは、幼茎が短く太いものを残し、徒長して幼茎がまのびしたものが傷みの出たものを間引きます。間引き作業を楽に行うにはタネをまき過ぎないことですが、ダイコンなどの幼茎の間引き菜はカイワレダイコンとして利用でき、無農薬なら、間引き菜はすべて安心して食べられますから、間引き作業も楽しく行えます。

こぼれタネが発芽したのがみな元気なように、無肥料、無耕耘で発芽した子葉にもいきいきとした生命力と伸びやかさのようなものが感じられます。発芽の美しさに心ときめく瞬間です。

(イラストレーター イラストも筆者)

覆土の厚み

好光性種子はタネが隠れる程度に薄く、嫌光性種子は5-10mmと厚く土をかける





MとKのこと

上坂元 絵里

今年度も、進級した十九人に十六人の新人児を迎えて、四歳児の生活が始まった。

入園進級式の日、保育室で、どんな新しい顔に出会えるのか、進級した子どもたちはどんな様子で現れるのか、緊張しながら待つ。いざ子どもたちが到着しだすと、次々に「おはようございませす。始めまして」とあいさつをするのもままなら

ないほどの目まぐるしさで、人数の多さに圧倒される思いを抱きつつの始まりであった。

人と関わるのが苦手なM

MとKは二人とも三年保育で入園し、進級した。Mは、夏の生まれにしては小柄で、幼い感じに見えるが、表情はあまり動かず、大人びた語



彙で話をした。電車が大好きで、入園直後は、柵から電車の本を選んで持ち出しては一人で眺めて過ごすことが多かった。保育室には木製の線路と汽車が置いてあった。電車が好きなのなら、それで遊ぶのが楽しいのではと考えたが、ほんの一、二度触ることはあったものの、それにすら取り付かなかつた。

丁子ちゃんが好き

電車の本を見ているMのそばに寄って行くと、詳しい知識を一方的に話してくれたが、他の子どもに話かけたりすることは余りなかった。そのMの、降園時に丸くなって座るときには、丁子の隣に座ろうと必死になる姿があった。丁子と隣の子との間に、別の所から椅子を持ってきて押し込めうとしたり、空いているうちにさっと座ったり、日頃の様子から想像できない積極的な動きを見せ

た。丁子のほうは、それに対して迷惑がったり困っている様子は見られなかったが、継続した仲良しの関係にまではならなかった。

大変に慎重なMにとって、園庭のお山までの道を登っていくことも最初はちよつとした挑戦だった。転ぶと引きつったように泣いてしまふし、丸太の遊具に乗ったりするのも手をつないで恐る恐るであった。

少し経つと、Mのお気に入りの場所はそのお山と、園庭の桜の木の近くになる。一人でトボトボと歩いていたかと思うと、通りかかった保育者に話しかける、気がつくとも桜の木の囲みの椅子に背筋の力が抜けた状態でボーっと座っている、そんな





な姿が目に入るので、私はMに対してもっと個人的な支援をする必要があるのにと焦りを相当感じていた。

人と一緒に過ごすこと

三学期頃になると、担任がタイミングよく橋渡しすると、大好きなお山で年長の女兒とドンジャンケンポンをして遊んだり、丸太を電車に見立て、数人の子どもたちと場を共有したりすることは出てきた。ただ、大人がその場を離れるとあつという間に、そこから離れてしまう。担任は、何とか人と関わる場面を作らなくては、今日は少し人と一緒に過ごす時間があつて良かった。そんな思いに随分とらわれていたと思う。

お山で焚き火をするのもMが気にいっている遊びの一つであった。

年中に進級して間もない四月のある日、不安で

泣きそうなSの気を紛らわそうとお山に行く。木製滑り台の所で、三歳男児が木の枝を持って「しにするの」と言っている。聞きなおすと「火にする」だった。「じゃあ、ここで焚き火にしようか」と私は答え、滑り台の近くに枝を集めようとした。そばにいたMが「焚き火ならいい所があるよ」と、丸太が段々に埋めてあるところに私を引っ張って行く。枝を集めようと探していると、たまたま紙粘土で作ったさつまいも（本来は保育室のままごとで使うもの）が落ちていた。「焼き芋も作れるかしら」と焚き火の中に置くと、M「これは電子レンジで」と別の処を持って行ってしまう。「焚き火で焼いたほうが美味しいわよ」と私は声を掛ける。Mは芋を木の枝の方へ戻す。そのうち、お山で遊んでいた子どもが三、四人集まってくる。ほんの少し経って『Mは?』と視線を泳がせると、Mはもう一つの丸太の方に一人で



行ってしまったていた。

このようにMが、人と一緒にイメージを共有して遊べる機会を持てるよう、保育者はかなり前に出ていろいろと試みている。けれども、結局Mはそこから外れてしまうことが多い。

人が寄ってきて関わりが生まれる好機なのにと保育者は考えるのだが、Mにとってはまだ何かを受け入れられない、大変なのだと思う。

人に対する愛着は持っているが、人との距離がある範囲を超えて近くなり、多くの人がそばに寄ってくると耐えられなくなるような……。

T先生との出会い

Mは保育初日に、今年度着任のT先生と園庭で出会う。T先生を独占しようと手を離さないM、少し気になった私は他のことに興味が向かないかと働きかけてみるが、MはまたすぐにT先生を追

いかけていった。

思い返してみると、教育実習生が来たとき、あるいは担任に対しても、これほど自分から追い回すような行動は見たことがなかった。新しい場にデビューしたT先生にとっても、このようなMのアプローチは嬉しい面もあったのではと推察される。Mにとっては、新しい出会いで、自分を先入観なしに見てくれるT先生の存在が嬉しかったのかもしれない。ほんの小さなことではあるが、Mの今までは違う面を垣間見た思いがした。

Mのこれから

年中組に進級して、子ども同士の関わり合いも





どんどん増えてくる。その中で、Mが友だちとの関わりをどう乗り越えていくのか、クラスの人数が増えた中でMに対して保育者はどう細やかに対応していくのか、まず私はそうした思いにとらわれていた。

Mは年中に進級して、特に目覚ましい変化や成長を見せている訳ではない。また保育者の側も、Mに対しての理解や関わりで、方向性が今まで以上に見えてきたとも言えない。

気になっていたMのことを、ここで書き綴りながら、今感じていることは、次のようなことである。

動けない、関われないMが、クラスの中にいるとき、私の心には、何とかMが動けるように、関われるようになってほしいという思いが大きな比重を占めていた。なぜ動けないのか、関われないのかを考えようとし、その上でMが動けるように

なるようにすることが保育者の責務と感じていた。

M可愛さの余り、保育者さえ目に入りにくいように感じる父親の関わりに原因を求めようとしたら、Mの気質的な弱さを考えたりもした。けれども「親子で遊ぶ日」の、母に甘え、嬉しそうなMの表情や動きを目の当たりにすると、単なる内弁慶の延長とも感じられた。

一年以上経った今だからこそ、Mの今をもう一度ありのままに受けとめ、無理のない歩幅で一歩ずつ歩んでいかれるように支えたいと思う。

つい先日、小さな積木を使ってタワーのように組み立てる遊びに、Mが随分能動的に関わったことがあった。別の先生が始めた一連の流れであったが、積木を真剣に積み上げ、次の積木を取りに行く動きには、心が動くとも身体の動きも生き生きすると素直に表現しているMがいた。物と楽しく



向き合い、関わるひとときもとても大切なのだと
感じたひとときまでであった。

Kのこと

三年保育の時のKは、気持ちが動き、好奇心が
いっぱい、よく遊ぶ子どもであった。その一方
で、自分が使って手離したおもちゃを、他の子ど
もが使おうと、走り寄ってひったくってしまう。お
弁当は落ちて座って食べられない、降園の流
れには乗りにくいといった面ではだいぶ手がか
かった。

一緒に通うお友だち

Kの通園コースは、多くの子どもたちが通うの
とは反対方向であった。年中に進級して、同じ方
向で通う人が随分増えた。

緊張しながら初めての幼稚園生活を始めたA

は、心が動きいろいろなことをして遊ぶKを後追
いするようにして遊ぶようになる。

五月のある日、Aが「Kちゃん、一緒に遊ぼ
う！」と、登園間もなく声を掛けた。当のKは
「エーッ？」とまずは、不満そうな声。しかし、
ほんの一瞬あとに「いいよ！」と応える。
「エーッ？」と「いいよ！」の相容れない言葉の
つながりを、ちようどそれを耳にした私は興味深
く感じた。

昨年度も、随分友だちとの関わりは増えていた





Kだが、このように手続きを踏んで遊びだす場面はあまり印象に残っていなかった。

自分の思いがあつて遊び始めていたKにとって、Aの誘いは対立する方向性を持つていたといえる。しかし、Kの中にもAに対する好意が生まれていたから、瞬時に返事が変わったのではないだろうか。結局この後、KはAと一緒に遊び始めはしなかった。しかし、AがKに親しみを持つて呼びかけたこと、Kも迷いつつ方向を変えて返事をしたこと、しかも言葉で言えたことが重要だったのかと、小さな場面で考えさせられた。

「どうすればいいの？」

春の園庭の片隅には、たけのこ掘りの楽しみがある。小さな竹やぶの細いたけのこだが、ちよつと鬱蒼とした暗さに、見つける、掘る、皮をむくと言つた楽しさが重なる。そこは、様々な子ども

の出会いの場にもなっている。T先生を囲んで、数人の子どもたちがたけのこを探していた。Kは大人用の移植ゴテを持ち、それで木の幹を強くたたいていた。T先生もちょうど、気にしてそれを見ていらした。私は近寄り、Kの半そでから出た素肌の腕を指差し「Kちゃんのこをたたくのと同じことだから、木も痛いよ」と少しさめるトーンで話しかけた。Kは動きは止めたものの視線は上げずに「じゃあ、どうすればいいの？」と聞き返した。私は、Kの動きを制止するニュアンスははっきりと伝えたつもりだったので、Kの素直な反応に一瞬驚いた。移植ゴテが出ていたのは、直前にプランターに朝顔の種をまいたときの片づけが不十分だったという反省の思いもあつた。「土を掘るのができるけれどね」と応える。Kが「あつ、僕たけのこ探してるんだつた」と言うので、一緒にたけのこを探し、移植ゴ



テで一本掘った。

Kは決して流暢に言葉が使える方ではない。しかし、Kとのやり取りの中で最近、とても的確に言葉が使えるようになったと感じることが多い。また彼が考えて話す言葉は、保育者の脳裏に印象に残ることが多かった。

子どもの育つ姿を糧に保育する

昨年来のKとのやり取りを思い出すとき、彼の動きを無理に押しとどめたり、言葉で説得しようとした後味の悪さが、私の身体には残っている。

いろいろなることを仕出かすKに対して、母親も随分と説得を試みている姿が見られた。

最近のKを見ると、自分で自分の思いを言葉で伝えられるようになり、納得して行動することが出来るようになり、幼稚園で生活することが随分楽になってきたように感じられる。

Kの育ちから、今までの私たちの対応を全て良しとしてはいけないけれども、Kのように、健全な育ちを見せてくれると、私たちはとにかく嬉しくなる。一方で、Mのように、まだまだ殻から抜け出せずにもがいている姿もある。私たち保育者は、Kのような「育つ姿」からエネルギーをもらい、Mが今の葛藤を乗り越えられるように支え、一緒に葛藤するエネルギーをもらっているのかとも思う。

(お茶の水女子大学附属幼稚園)

編 集 後 記

「びぐれっと」という映画をみました。これは、以前に金田利子先生が連載の中（九十九卷三号）で紹介された映画「えんとこ」の監督・伊勢真一氏の最近の作品です。

「びぐれっと」は横浜市泉区にある地域作業所です。今から二十年前に、障害のある子どもを持つ数人の母親が、おしゃべりをしながら何か手を動かしていこうと集まったのが始まりでした。その活動は、電気製品の部品の内職、バザーへ参加する人形作り、お菓子作りと広がり、「地域で子供たちがハンデキャップをもちながらでも、生き生き暮らせる場をつくりたい……」そのための

活動資金づくりをしよう、へと発展していきました。

いまでは、「びぐれっと2、3」

もでき、活動の拠点も三カ所になりましたが、「地域で生き生き暮らせる場所作り」は変わりません。例えば、朝のシーンは、缶つぶし、ローソク作り、お菓子作り、散歩、の中から自分が今日やりたい作業を選ぶことから始まります。また、「びぐれっと3」はシヨップ型の作業所・パン工房と喫茶店で、「お洒落な店が入って見たらハンデイのある人たちが働いていた」という店作りです。映画をみてみると、一緒にいることが楽しい、この集まりを大切に続けたい、というお母さんたちの思いが、作業所という形になったことがわかります。

(A)

幼 児 の 教 育

第一〇一卷 第九号

(二〇〇二年九月号)

定価五五〇円(本体五二四円)

発行 平成十四年九月一日

編集兼発行人 田代和美

発行所 日本幼稚園協会

〒112 東京都文京区大塚二丁目

お茶の水女子大学附属幼稚園内

印刷所 図書印刷株式会社

〒108 東京都港区三田五丁目二丁目

発売所 株式会社 フレーベル館

〒113 東京都文京区本駒込

六一四一九

〒〇三二五三九五五六六二一三(営業)

〒〇三二五三九五五六〇四(編集)

振替 〇〇一九〇二一九六四〇

☆ 本誌ご購入のご注文は発売所フレーベル館にお願いします。

☆ 万一、乱丁・落丁などがございましたら、おとりかえいたします。



大人気！手づくりアンパンマンシリーズに、新しい1冊が加わりました。

手づくりアンパンマンがいっぱい6

つくってね あそんでね

最新刊

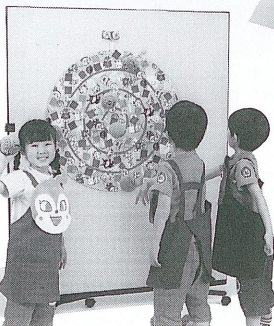
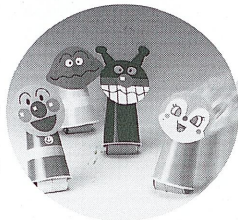


*作るのも楽しい、遊べばもっと楽しい、簡単おもちゃを、アンパンマンの仲間たちのキャラクターで作みましょう。

*子どもが一人でも作れるものを中心に、ちょっと大人の手助けがいるものも加えて、楽しく手づくり、会話ははずみます。

*BS日テレ「それいけ！アンパンマンくらぶ」で放映された作品もあります。テレビで見ている人も、いない人も、この本で、手づくりにチャレンジ！

とことこ
アンパンマン
とことこ作るよー
アンパンマン



ジャ〜ンプ！
ジャンプ ジャンプ
ロケットジャンプ



なかよしダーツ
「わをしがダーツ
チャンピオンよ！」

☆島田明美☆
「楽しくなければ仕事じゃない」を
基本スタンスに、
楽しい工作のアイデアを
発表しています。

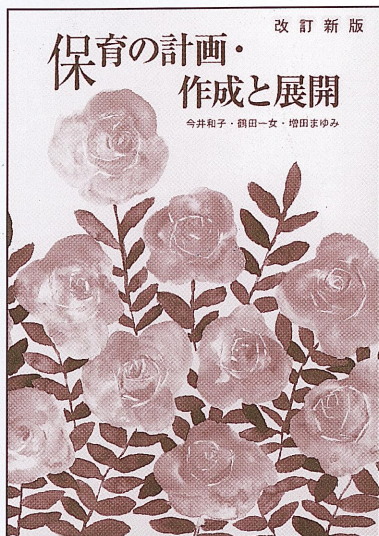
島田明美／著

A B判 96頁 定価：本体2,000円＋税

キンダーブックの
フレール館

「平成11年改訂 保育所保育指針」にそって新しくなりました。

改訂新版 保育の計画・作成と展開



著者
今井 和子 東京成徳短期大学教授
鶴田 一女 越谷保育専門学校専任講師
増田まゆみ 小田原女子短期大学教授

- *新しい保育所保育指針の考え方をふまえた保育の計画とその実際例を示しています。
- *計画の考え方、立案の手順などを丁寧に解説し、それぞれの園の実情にあった計画が立案できるように配慮されています。
- *立案された計画と、実際の活動(計画の展開例)を示し、計画の見直し、修正、そして実践と、計画と実践の関係が具体的にわかるようになっています。
- *産休明けから5歳児まで、年齢別に年間計画例、月指導計画例、日案例が掲載されています。
- *今回の改訂で強調されている、家庭との連携にポイントをおいた計画例を掲載しています。
- *長時間保育、夜間保育など、子どもを取り巻く環境の変化による新しい保育課題に応じたさまざまな計画例を掲載しています。

B5判 208頁 定価：本体2,000円+税

キンダーブックの
フレール館